

新
録

類は金目虎き
類は金目虎き
もの相手格式
慮
うきと

一食事定まふ

朝 漬物

書 一江一葉

夜 一有二三

見屋御家訓物語

めまきち
かりち



(一)

花登
筐

あまくちからくち (一)

著者 花登 筐

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇

郵便番号 一〇五

電話 (四三三) 六二三一

振替 東京四四三九二

印刷 長苗印刷

製本 大口製本

昭和四十六年八月十日 初刷

定価 五二〇円

あまくちからくち ■ 目次

十分の差	3
革命決意	20
女心	37
波紋	55
つまずき	74
火は消えず	92
花咲かば	110
縁談	128
父の哀しみ	145
木蓮とネクタイ	163
敵に塩	181
産業スパイ	201
お百度	219

題字 望月美佐
装帧 和田 豊

十分の差

1

京の伏見は酒づくりの町である。

市電を肥後橋で降りると、プーンと酒の香がただよってくるようだ。それもそのはず、大小四十軒近い蔵元が軒を並べ、年間四千万キロリットルという、灘に次ぐ醸造高を誇っているからである。

蔵元といえば、古風な土蔵造りの酒蔵と人間一人スッポリ入れるような大樽が想像され、事実そういう蔵元はいまも残ってはいるが、大部分は近代化され、鉄筋の大工場がハバをきかせ

ている今日この頃である。

——ここ伏見屋は、その数少ない昔ながらの蔵元の一つである。

ただでさえ狭い伏見屋の前の道なのに、そこに大樽を並べて干してあるのでトラック一台やっと通れるくらいのところへ、どう迷い込んで来たのか、タクシーの空車を通りかかる。店の前ではちょうど蔵出しの最中で、店員が酒瓶を一本一本のんびり数えながら小型三輪へ積み込んでいたので、タクシーは通るにも通れない。「ちょっと……。どいてくれんと通られへんがな」

しばらく待っていたタクシーの運転手がたまにかねて声をかけると、店員がやり返す。

「うるさいな、ここをどこや思うとるねん。京の伏見やで。酒づくりの町や、酒積んでる車に文句言えるかいな」

「そやけど、こっちは急いでるのや。三時まで

に七条へ行かんらんちゅうのに……」

「こっちかて忙しいのや。一本でも勘定合わんかったら大ごとや」

「そんなこと言わんと、ちょっと動かしてえな」

「あかん、あかん。急ぐのやったら、ヤイヤイ言わんと一緒に数えたらどうや。ええと、何本やったかな、もういっぺんはじめから数え直しや。一本、二本、三本、四本……」

それにつられて、タクシーの運転手も勘定を始めた。

「一つ、二つ、三つ、四つ……」

京の伏見はそんな町なのである。

2

水は酒の命だ。東山の南端、稻荷山から桃山にかけての土質を通った地下水がこの地の酒を育ててきた。戦前、奈良電鉄が敷かれる時、電

車が伏見の地下を通る計画だったのが、大事な水が断たれると酒屋が一致団結、電車を地下に潜らせなかったという。

伏見の酒は甘口でも辛口でもなく、ウマ口だと、ある蔵元は自慢する。それほど味がきれいでやわらかいのだそう。この持味は遠く雄略天皇の昔からの伝統がつくりあげた。

ここでは酒米にモチ米をまぜている。これがやわらかい独特の味を生み出す。兵庫の灘ではそんなことは邪道だという人がある。伏見はその灘をライバルとして酒づくりの腕をみがいてきた。

伏見屋もそうした誇り高い蔵元の一つである。だが、この家で造られる酒には銘柄（商品名）がない。それが、伏見屋の主人長右衛門（ちやうゑもん）の長男で、将来家を継ぐはずの稲夫（いなむ）には不満なのだ。

今日も彼はそのことで父に噛みついた。

「これだけの酒蔵があり、これだけの量産もし

ている伏見屋ですよ。しかも、味は伏見の一流の酒として通用しているんです。うちで商品名をつけて売ればいいんです。今の十倍も二十倍も利益が上がります」

すると、長右衛門は老眼鏡の上からジロリと眼をむけて、

「売れんかったらどうする？」

「売れるように努力するんですよ。マスコミを使って、どんどん宣伝します」

「それでも売れんかったらどうする？」

「売れるようにするんです」

「それでも売れんかったら……」

稲夫はグツとつまった。

長右衛門はそれみろとばかりに、

「損するやろ。損するような危ない商売、なんでやる。お前、伏見屋の御家訓（おんかこん）を忘れたか！」

ピシリときめつけると、

「幸市（さいいち）とん、読んだり」

と、そばの古い事務机でそろばんをはじいている支配人の瀬川老人に声をかけた。

瀬川は一度は眼をあげて、事務室の壁にかかっている家訓の額を見たが、すっかり頭に刻み込んであるとみえて、すぐ眼を離すと、

「天を仰ぎ地をうかがい、右を見て左を見、前後を見て、なお危なき橋を渡るべからず」

スラスラと誦（よみ）え上げた。長右衛門は満足そうに頷（うなず）きながら、

「そんなことでは、まだまだこの店の跡とりにはなれんな」

そう言うのと、すっと立ち上った。

「ちょっと、お稲荷さんにまいってくる」

伏見屋には先祖代々伝わる家訓があり、商売に関することだけではなく、日常生活の万事についてこれを守ることになっていた。

伏見屋が自家で造った酒に銘柄をつけて売り出さないのもその家訓のせいだった。昔、伏見

屋の先祖は本家の番頭をしていたのだが、一軒店をもたしてもらった時から、本家におさめる酒しかつくらないということを家訓にしているからだ。

主人の長右衛門や瀬川支配人の頭には、それがこの家の宿命として強く刻み込まれているのだが、若い稲夫にはどうしても納得ができない。昔は昔、今は今、遠い先祖に義理立てして、みすみす儲かる商売を見送る手はないじゃないか。いや、商売のことに限らず、稲夫には一事が万事この古くさい家訓が気に入らなかった。

たとえば、店の伝票の扱いにしてもそうだ。

瀬川の娘で、店の事務をやっている市代（いちよ）がまず伝票をチェックする。それを瀬川が見て間違いないかどうかをたしかめ、次に稲夫がたしかめ、更に長右衛門がたしかめる。

「一を数えて、二を数え、三を数えて、二に返る」という家訓を忠実に実行しているわけだ。

「それが不合理やちゅうのや」

稲夫は父親に軽くイナされた憤懣（ふんえん）を、今度は瀬川にぶつけた。

「僕が高校出てこの店に働き出してから今日まで、あなたの計算一回も間違ごうてたことないやないか。それをや……」

「もし間違えたらどうします」

「間違えるはずあらへん」

「百万の数字を十万と書いたらどうします。桁（け）違いですみますか。一人がそろばん入れ違い、二人目も間違い、三人目でわかるときがあるんです」

「そやさかい、そろばんみたいなもん使わんと、電子計算機を置いて……」

「故障したらどうします」

この瀬川老人、稲夫が生まれるずっと前から店につとめているというのだから、やっぱり歯がたたない。

「わかったよ」

と、結局稲夫は矛をおさめるほかはないのだ。瀬川が用事で店を出る時は、必ず大声で市代に小金庫の在高あうだかを告げてゆく。すると、市代が大声で復誦する。

「小金庫の在高、一万八千七百五十三円ナリ」

それを聞くと、酒蔵の方でも誰かが大声で、「一万八千七百五十三円ナリ！」と繰り返す。

「まるで氣違い沙汰や。なんで出てゆくととき、いちいち金額いわんならん」

稲夫がうんざりしてつぶやくと、市代が顔をあげ、

「みなが金額知っていれば、悪い氣おこさんやろということです」

と、クスクス笑いながら答えた。

「それや、それが時代錯誤やちゅうのや」

稲夫にとって市代は同世代の女性だけに、氣持が通じるはずだった。いや、それ以上に稲夫

は彼女に対して特別な親しみを感じていたのだ。「君、矛盾を感じへんのか。河原町通り歩いてみいな。君ぐらいのとしのひとがミニスカートはいて、男の手引っぱって歩いてる。そんな時代やのにやで……」

もちろん、市代には稲夫の氣持がわかりすぎるほどわかっていたが、父の立場を考えると、稲夫の言うことをそのまま肯定するわけにもいかないのだ。

「でも、ぼん、あんまり短いスカートきらいでしょう」

猫も杓子もミニばやり、恥ずかしげもなく大根あしをさらしているのに、彼女が膝スレスレのところでは我慢しているのもそのためだったのだが、

「もう、そのぼんて言葉もやめてくれ！ 稲夫でええのや」

肝腎かんじんのききたいことには答えてくれず、怒鳴どな

りつけられて、市代は首をすくめた。

「稲夫さんで言いくいもん」

すると、稲夫はわが意を得たりとばかりに、

「まったく、稲夫で名前もいやな名前や。僕が稲夫で、弟が荷名夫、二人の稲と荷合わせて稲荷やて……。そのうえ、姉さんが伏久子で妹が見代子、四人そろって伏見稲荷やて。もう一人生まれたら、狐とでもつけるつもりやったんかいな」

ちょうどその時、

「ただいま」

と声をかけて、高校生の見代子が帰ってきた。

「狐の一步手前が帰ってきよった」

市代が思わずブツと吹き出したところへやっ

て来た見代子はムツとして、

「なんやの、何がおかしいの」

「いいえ、べつに……。すんまへん」

笑いをこらえながら謝る市代を尻眼に、

「けったいな人……」

とつぶやきながら、見代子は祖母の部屋へ入っていた。

3

伏見屋当主の長右衛門は先祖代々の家訓を忠実に守るだけが能という、ごく平凡な常識人、妻の波江との間に二男二女がある。長女の伏久子は見合結婚で、大阪でも名のある罐詰問屋の次男坊に嫁いでいる。

次が長男の稲夫というわけだが、実は次男の荷名夫のほうが先に生まれているのだ。といっても、その差はわずかに十分、つまり、この二人は一卵性双生児なのである。百科事典を見ると「双生児の順位は産科学上では最初に生まれたものが第一児とされ、次に生まれたものが第二児とされるが、我国の風習としては最初に生

まれたものを次男または弟、或は次女または妹とされ、後に生まれたものが長男または兄、或は長女または姉とされることが多い」と書いてあるが、伏見家でも風習通りあとから生まれた稲夫が兄ということになっている。

末っ子の見代子は生意氣盛りで、そろそろお洒落しゃわらがしたくなる年ごろだ。

伏見屋は代々家督を相続するものが長右衛門を名乗ることになっており、このままでいけば稲夫もいずれ長右衛門になる運命にあるわけだが、先代の長右衛門は五年前、八十一歳の長寿を全うして他界したが、祖母の千代ちよはまだ健在で、隠然たる勢力をこの家の一隅に保っている。

その千代が居間の縁側で着物を解きほぐしているところへ母の波江が来て、

「お母はん、精がでますでございますえなあ。お茶が入りました」

と茶をすすめ、自分もそばで針仕事にかか

と、

「ああ、波江はん。これ、あての娘時代のべ、でなあ。見代子に縫い直して着せてやろと思うのや。あの子、今度学校の何かの会で、べべ着たいいうてたやろ」

「へえ、そら喜びますやろ」

そこへ見代子がやって来た。

「おばあちゃん、ただいま」

「お帰り」

「見代子、おばあちゃんが中学の同窓会に着て出るあんたのべ、縫うてくれてはるんとすて」
すると、見代子は喜ぶどころかブツと頬をふくりました。

「えッ、新しいのつくってくれるのンと違うの」

「何いうてるのえ。今年は、荷名夫の背広つくったさかい、着るもんの予算はもうおへん」

祖母の手前、あわてて波江がたしなめたが、そんなことで引き下がる見代子ではない。

「けど、同窓会くらい、新しいもん着んと恥ずかしいわ。みなええ着物着て来はるんやもん。

着倒れの京都やないの」

と巻き返したが、そうなると千代も黙っていない。

「見代子、あんた、京の着倒れて、どういふことか知っといるのえ」

「京都人は破産するほど、いい着物に凝^こるってことでしょう」

「何いうてる。ええか、京の女子^{おなこ}は、たしかにええべべ着るえ。ええべべちゅうのは京友禅のことや」

と膝にほどいた着物をつまんで見せながら、

「この通り、ええ京友禅は柄がそう変わらん。つまり、親子孫三代着られるさかいや。そこで呉服屋はんは、あまり売れんで倒れてゆく。これが京の着倒れや」

もちろん、これは千代のこじつけで、見代子

のいうほうが正しいのだが、一度言い出したらきかない祖母の性格を知っているから、見代子もそれ以上頑張るつもりはない。

「へえ、新解釈やね」

せいぜい皮肉を利かせたつもりで言っ出て行ったが、はたして千代に通じたかどうか。

「すんまへん。母親のあてが至らんもんどすさかい」

波江が千代の顔色をうかがいながら頭を下げると、

「いえいえ、おばあちゃんのあてがいかなのどす」

と、一応は寛大なところを見せる千代だが、

「けどなあ、波江はん、あんたあとでこっそり着物つくってことしたら、あきまへんえ」

と、一本釘を打つことは忘れない。

「いえ、めっそうおへん」
「そうかて、伏久子が嫁入りした時、あんた、

あての目ごまかして、訪問着一枚余計つくらはった。そのおかげで、一年間おみおつけのお豆腐ひと切れ少のうなっただえ」

そう言われると一言もない。まさにその通りだった。だが、どうして千代がそれに気づいたのだろう。こっそり注文したから絶対に知れるはずはなかったのに。

波江が返事に困っていると、それに追討ちをかけるように、

「よろしいえな、ほれ」

と、千代がなげしの上に眼をやった。

そこには、店とは別に、家人家訓を書いた額がかかっていて、その一条にこうあった。

『嫁は子に溺れるべからず。女子、嫁にゆくと、嫁入道具は五荷とす。なれど、衣服類は、金目高きもの、相手格式考慮の上、ほどほどにすべきこと』

4

その頃、近くの小さい喫茶店、「三ちゃんのお店」で、稲夫は市代を誘いだしてお茶を飲んでいた。

「まったく、こんな家の長男になんて生まれてきたんやろ。長男、次男いうても、僕ら双生児やで、おふくろの腹から弟が先に出て、あとから僕が出て来ただけや。それもわずか十分の差、十分の差で兄と弟になったんや。そやのに、僕はこんなジャンパー着せられて、家訓、家訓、家訓、毎日決まりきったそろばんはじかされて、年じゅう同じ酒を同じだけつくって、同じ値段で売って、同じ利益上げて、同じだけの予算で同じもん食べて、そやろ、あの伏見屋で、臨時に入ってくる収入で何や、酒のカス代だけやないか。それも病気の治療代や冠婚葬祭の費用に

とってあるやて。それで、僕の月給三千円……。ただの小遣いやないか。煙草買うて映画二、三回見たらおしまいや」

時々、稲夫はこうして市代を誘い、この喫茶店へ息抜きに来る。五十すぎの女主人が一人でやっている小さな小さな喫茶店で、安くてわりとうまいコーヒーを飲ませてくれる。ここで市代を相手に、日頃胸にたまっているモヤモヤを吐き出していると、少しは気が晴れるのだった。

市代も稲夫と二人きりでいる時間は楽しい。それで気が晴れるのだったら、いつまでも稲夫の愚痴を聞いてやりたいとも思っていた。しかし、稲夫は伏見屋の跡とり息子だし、自分は支配人と呼ばれているがいわば番頭の娘である。あまり親しくすると人目がうるさかった。

市代だって高校を出ている近代娘だ。身分の違いなどにこだわりたくないし、そういう封建性に反撥する気持もある。だが、父と自分と、

それに兄の義治^{よしはる}までが酒蔵の事務員として伏見屋につとめている以上、やはり人目をはばからないわけにはゆかなかった。もし、自分と稲夫との間に変な評判でもたてられたら、自分はいが父や兄に迷惑をかけることになる。だから、彼女は喫茶店で稲夫とすごすのが楽しくもある一方、時間のたつのが気が気でなかったのだ。「ぼん、もう行かんと父が帰ってきますわ。それに、旦那さんもう……」

市代のそんな心遣いが稲夫には面白くない。「なにそうビクビクするのや。コーヒーぐらい飲んでどうやいうねん。弟は毎日学校からの帰り、河原町で友だちと喫茶店行ったり、ボーリングしたりしとるやないか。えらい違いや。十分の差で……」

と、またもや同じ愚痴になる。

「けど、荷名夫さんには荷名夫さんでまたいろいろと……」

「君、弟の肩もつのか」

「そうやないけど、試験とか就職とか……」

「就職……うらやましいわ。どこで働こうと自由や。背広着て日曜日には好きなどこへも行ける。車かて買える。僕は、車いうたら自転車や……。阿呆^{おほう}らしいていかんわ。そやさかい見えてみい。双生児で生まれて、小学校へ行くまでは性格も同じ、顔もいっしょやったのがだんだんに違いが出てきて、僕は家訓に圧迫されて酒のカスみたいになってきたのに、弟のほうは陽気で開放的で、アルコール度数の高いツヤツヤした顔してきとる」

一氣にまくし立ててふとわれに返ると、

「ごめん、また言うてしもた。君といるときはこんな話はせんとこうと思ふのに……」

「かまへんの。愚痴言うてスーッとしやはるのなら。小さいときから、うち、ぼんの愚痴聞き役やったもん。うちだけやないわ。父は旦那さ

んの愚痴の聞き役……先祖代々伏見家の番頭つとめるわが瀬川家の、これが家訓ね」

「ほんなら、君の愚痴の聞き役は……」

「兄さん」

「君の兄さん、羨しいな、活気があって……」

じっさい、市代の兄の義治は元氣者だった。稲夫にとっては小学校、中学校を通じての先輩だが、仕事の上でのよき協力者でもある。伏見屋が単なる本家の下請業者であることに不満をもっていることでは、稲夫以上かもしれない。た。

それからしばらくして一足先に喫茶店を出た市代が店へ戻ろうとすると、向こうから稲夫の弟の荷名夫が、大阪へ嫁いだ長女の伏久子と連れ立ってくるのが見えた。稲夫と一緒にいるところを見られてはまずい。早く喫茶店を出なかったことを後悔しながらあわてて喫茶店へ引き返すと、まずいことには、あとから荷名夫たちもこ

の店へ入ってくるではないか。

逃げるに逃げられず、市代は「どうしたんや」といぶかる稲夫の後ろで小さくなった。

「まあ、稲夫ちゃん、……おや、あんたは幸市さんの……」

店へ入って来た伏久子は二人に疑わしげな眼を向ける。いたたまれなくなつて市代が、

「お先に……」

と、とび出してゆくのを見送ると、伏久子はなじるように稲夫にいった。

「なんやの、あんな子、なんで昼間から喫茶店へ連れて来てるの？」

「違う、偶然や、ほんまや」

自分たちの不運に腹を立てながら稲夫はあわてて否定したが、伏久子はそれには耳もかさず、「なんや知らんけどまだ仕事の時間やろ。相続人のあんたがあんまりけったいなまねしたら、うちら姉弟が笑われますさかい……」

これには稲夫もムツとした。荷名夫は伏久子のうしろでニヤニヤしているだけだったが、稲夫はそんな弟にも腹が立った。

「何がけったいなまねや」

「そやおへんか。番頭の娘やなんて」

「姉さん、古いな。番頭番頭で言わはるけど今は支配人や」

「うちらにとつては番頭どす」

「何でもええけど、……あんまりお母はんにしやうもないことしゃべらんといてや」

長居は無用と稲夫も逃げ出すことにしたが、市代と一緒にところを姉と弟に見られたのはたしかにまずかった。よりによって、なんで姉は今頃大阪から出て来よったんやろ。こんなことならもうちっと早よう切り上げるんやったと市代と同じような後悔をしたが、もうあとの祭りだ。ええ、かめへん、何も悪いことしたわけやなし、知れたら知れた時のことや。そう覚悟を